

《 論 説 》

近世庶民の伊勢参宮の旅にみる歩行距離の実際
～旅の全行程の検討～

谷釜 尋徳

1. 問題の所在

近代以前の日本の陸上交通において、人や物の移動は人力によって果たされることが多くみられた。ゆえに、近世の庶民が長期間におよんで旅をする際にも、道中の移動は主に徒歩に限られたものであった。関東地方から伊勢参宮の旅に出る場合を引き合いに出してみても、その期間は短くて数週間、長い時には数ヶ月間におよんでいるが、旅人は連日のように長距離を歩き続けている⁽¹⁾。それでは、彼ら旅人は毎日の道中においてどの程度の距離を歩いたのであろうか。このような関心から、本稿は近世庶民の伊勢参宮の旅を取り上げ、彼らが歩んだ距離の傾向を明らかにすることを通して、当時の旅の実際についてみたい。

ここで、本稿に先行する関連の諸研究を眺め返してみよう。旅の歩行距離の傾向を知るためには、その前提として旅人が通行したルートを確認しておく必要がある。このことに関する先駆的な試みとして、山本は「旅の形式化」という視点から、東北および関東地方からの伊勢参宮ルートが定番化していた点を指摘した⁽²⁾。また、櫻井は東北地方からの伊勢参宮ルートの類型区分を提示し⁽³⁾、さらに小野寺は関東地方からの伊勢参宮ルートに明確な年次的変化を見出すことに成功している⁽⁴⁾。なお、類似の研究成果として、江戸近郊地の庶民が伊勢参宮の旅をした際の在地～伊勢間の往路ルートに、細部におよぶ定番ルートの存在を見出した拙稿もある⁽⁵⁾。

以上のように、伊勢参宮の旅のルートについては、比較的多くの史実が紐解かれてきた。しかしながら、そのルートを歩んだ旅人の歩行にまつわる諸現象の解明が積極的に試みられてきたわけではない。とりわけ、旅人の歩行距離の問題に立ち入って詳細に検討した研究となると、管見では拙稿のほかには見受けられない。こうした動向は、これまで近世の旅に関する考察が、主に交通史学や歴史地理学の関心事であったことと関係している⁽⁶⁾。人間の歩行運動にまつわる諸現象は、スポーツ史的な関心に基づく研究課題だからである。

上記の観点から、これまで拙稿においては、近世後期の庶民が伊勢参宮の旅の道中で記録した「旅日記」⁽⁷⁾を基本史料として、江戸～伊勢間の往路ルートの歩行距離を対象としてきた⁽⁸⁾。それは、一つには現存する旅日記のうち伊勢参宮に関するものが圧倒的多数を占めていること、二つにはその伊勢参宮の旅日記において最も記述が詳細な区間が江戸～伊勢間の往路ルートであること、三つには考察の対象を同一ルートに限定することで、道普請の状況や勾配の違いなどといった環境的な差異をある程度払拭できると考えたためでもあった。この手法によって、数十編におよぶ旅日記を同じ条件下で分析することで、数量的にある程度の客観性をもった結論が導き出されてきたことは事実である。

その一方で、上記の方法論は、旅の全行程のなかから旅日記の記述が鮮明な区間（江戸～伊勢間）のみを扱っているという意味で、それ以外の「都合の悪い」区間は検討の余地なしとして対象から除外してきたといわねばならない。しかしながら、旅の全容を鳥瞰しようとする時、全体に占める江戸～伊勢間の割合いはほんの一部でしかなく、実際には伊勢参宮後の旅程にこそ長期間を費やす場合が大半であった。そこで本稿では、近世庶民の伊勢参宮の旅における歩行距離の実際を探るべく、検討の対象を旅の往復路の全行程にまで広げて、その傾向を明確にするものとした。

本稿において旅人の歩行距離を明らかにするにあたっては、旅日記の記述を頼りに、旅人がその日に出立した場所から宿泊した場所までの距離を計測する手法を採っている。そのため、旅の全行程を考察の俎上にのせるためには、旅のルートはもちろんのこと、在地を出立してから伊勢を經由して再び在地に帰

着するまでの間、毎日の宿泊地に関する記述が漏れなく判明している旅日記を取り上げねばならない。

近世において記された伊勢参宮の旅日記を蒐集してみると、上記の条件に適う史料が僅かながら存在していることがわかる。すなわち『伊勢道中附』⁽⁹⁾ (1768)、『伊勢参宮道中記』⁽¹⁰⁾ (1857)、『伊勢参行紀行』⁽¹¹⁾ (1862) の3編である。この3編の旅日記の記述内容が、本稿が依り拠とする基本史料となる。従前の拙稿における歩行距離の検討が、可能な限り多くの旅日記を蒐集したうえで、導き出された結論に数量的な見地から客観性を求めたのに対して、本稿では個別事例を深く掘り下げて課題を解き明かしていくものであるといえよう。

上記の課題を達成するために、まずは各々の旅日記が語る旅の全行程と歩行距離を個別に検討し、次いでそこで明らかになった歩行距離に関する概ねの傾向を項目別に整理するものとしたい。

2. 伊勢参宮の旅日記にみる旅の全行程と歩行距離

2-1 明和5 (1768) 年、五味ヶ谷村の滝島忠右衛門の旅

はじめに取り上げる旅日記は、明和5 (1768) 年に伊勢参宮の旅をした、五味ヶ谷村 (現・鶴ヶ島市) の滝島忠右衛門による『伊勢道中附』である。

忠右衛門は総勢14人におよぶ集団を組織して、次のルートを通行した (図1参照)。在地を出立した彼らは、初日は橋本に宿泊している。翌日、東海道に合流してひたすら西へ進み、9日目に池鯉鮒に宿を取る。10日目は佐屋路に入り、11日目に再び東海道に合流した後は四日市追分から伊勢路に至る。その後2日間をかけて、晴れて伊勢に到着した。

その2日後、忠右衛門一行は伊勢を後にし、佐屋路の津島あたりまでは往路と同じルートを引き返す。しかし、その後は東海道に合流することはなく、名古屋付近から佐屋路を外れて中山道に入り、28日目に無事五味ヶ谷村に帰り着いた。

以上が滝島忠右衛門の伊勢参宮の旅にみる全行程であるが、彼ら一行はこの道中をどのようにして歩んでいったのであろうか。このことについて整理した

表2をみると、忠右衛門らによる旅の総歩行距離は約989.1kmとなり、30日足らずの道中で1000kmに迫る距離を歩いていたことがわかる。また、彼らの1日当たりの歩行距離に着目してみると、最長の日（松坂～四日市間）で約46.8km、最短の日（往路の松坂～伊勢間と復路の伊勢～松坂間）でも約19.5kmとなり、1日平均では約36.6kmもの距離を歩いた計算になる。

なお、彼らの歩行距離を便宜的に10kmごとに区切り、距離別の割り合いを求めてみると、その多くが30km台および40km台に偏っていることから、毎日の歩行の目安は概ねこのあたりの距離に定められていたことが窺えよう。



図1 五味ヶ谷村の滝島忠右衛門の旅程

※滝島忠右衛門「伊勢道中附」（1768）『鶴ヶ島町史 近世資料編Ⅳ』鶴ヶ島町、1985年、より作成。

表1 五味ヶ谷村の滝島忠右衛門による旅の歩行距離

日程	区間	距離(km)	日程	区間	距離(km)
1日目	在地～橋本	46	15日目	～松坂	19.5
2日目	～梅沢	31.2	16日目	～四日市	46.8
3日目	～三島	39	17日目	～名古屋	43.8
4日目	～由比	39.7	18日目	～高山	37.9
5日目	～岡部	35.1	19日目	～馬籠	39
6日目	～掛川	32.8	20日目	～上松	36.1
7日目	～浜松	32.8	21日目	～贅川	35.1
8日目	～御油	42.1	22日目	～会田	40.3
9日目	～池鯉鮒	31.4	23日目	～篠ノ井	33.2
10日目	～津島	46.1	24日目	～坂城	41
11日目	～神戸	38.4	25日目	～追分	44.9
12日目	～松坂	27.3	26日目	～妙義	30.1
13日目	～伊勢	19.5	27日目	～八幡山	41
14日目	伊勢逗留		28日目	～在地	39

※滝島忠右衛門「伊勢道中附」(1768)『鶴ヶ島町史 近世資料編Ⅳ』鶴ヶ島町、1985年、より作成。

表2 五味ヶ谷村の滝島忠右衛門による旅の歩行距離の傾向

計測対象日数	27日	
総歩行距離	989.1km	
1日平均の歩行距離	36.6km	
最長の歩行距離	46.8km	
最短の歩行距離	19.5km	
歩行距離の割合	1桁台	0日
	10km台	2日
	20km台	1日
	30km台	15日
	40km台	9日
	50km台	0日
	60km以上	0日

※滝島忠右衛門「伊勢道中附」(1768)『鶴ヶ島町史 近世資料編Ⅳ』鶴ヶ島町、1985年、より作成。

2-2 安政4（1857）年、下新井村の鈴木源五郎の旅

次に、下新井村（現・所沢市）から伊勢参宮の旅に出た鈴木源五郎の旅日記『伊勢参宮道中記』を分析する。源五郎の旅は、安政4（1857）年12月13日から64日間におよんで敢行されたもので、同行者は合計18人の大所帯であった。

まずは、源五郎一行の足取りを辿ってみよう。在地を出立した一行は、一路伊勢を目指して2日目に東海道に合流する。9日目には掛川付近から東海道の迂回路となる秋葉街道に入り、12日目に再び東海道に合流しているが、このルートは江戸をはじめ東日本から伊勢参宮をする際の定番ルートとして近世後期には一般化していた⁽¹²⁾。

その後、東海道の宮付近から佐屋路経由で桑名に至り、さらに四日市の追分から伊勢路を歩いて17日目に伊勢に到着した。上述した滝島忠右衛門の旅では伊勢到着後は帰路についているが、源五郎たちはここで引き返さずに西に足を延ばす。20日目に伊勢を出立した後は、奈良や高野山での寺社巡りを経て大坂に至る。さらに、山陰道経由で中国地方を横断し、岡山付近から瀬戸内海を船で渡って39日目にはついに四国に上陸した。翌日は丸亀にて金毘羅参詣を果たし、関西までは海路で移動する。その後は、京都見物を経て中山道に入り、57日目に善光寺に参詣を果たすと、64日目に在地の下村に帰着し長旅を終えた。

ここで、源五郎一行の道中の歩行距離を明らかにしておきたい。表4によると、彼らの旅における総歩行距離は約1907kmとなり、先の滝島忠右衛門よりも1000kmほど長い。これは、源五郎らが伊勢参宮後に引き返すことはせずに関西地方に向かい、さらに四国まで足を延ばしていることによるものである。

彼らの1日当たりの歩行距離を算出すると、平均で約34.6km、最長の日（片上～夏川間）で約62.4km、最短の日（伊勢～明星間）でも約11.7kmを歩いていた。最長で60kmを超える距離を歩いたことは注目すべきであるが、彼らはただ一直線に先を急いでいたわけではない。当時の旅は、時に街道を外れて名所旧跡を訪ねたり、途中の茶屋で名物を口にするなど、道中に散在する異文化に触れながら歩くものだったからである⁽¹³⁾。ここに、源五郎らの健脚ぶりを窺い知ることができよう。このことを裏付けるように、表4では距離別の割り合いが

30km台に集中しているものの、平均値(約34.6km)をゆうに超える40km台以上を歩いた日数の合計は、実に14日にもおよんでいる。

ところで、先にみた滝島忠右衛門による旅のルートがそうであったように、源五郎の旅でも往復路で異なるルートを選択している。この傾向は、文化7(1810)年刊行の旅行案内書『旅行用心集』に次のような一節があることから推して、当時行われた旅全般に広くみられたものであろう。

「東國の人ハ伊勢より大和京大坂四国九州迄も名所旧跡神社仏閣を見回り
西國の人は伊勢より江戸鹿島香取日光奥州松島象潟信州善光寺迄も拝ミ回らんことを願ふなり」⁽¹⁴⁾

それでは、当時の旅人は、なぜ往復路で異なるルートを通行したのであろうか。近世においては、行商人や旅芸人など特定の職に就く者でない限り、庶民が自身の居住地域を越えることは稀であった。そのため、当時の庶民には日頃

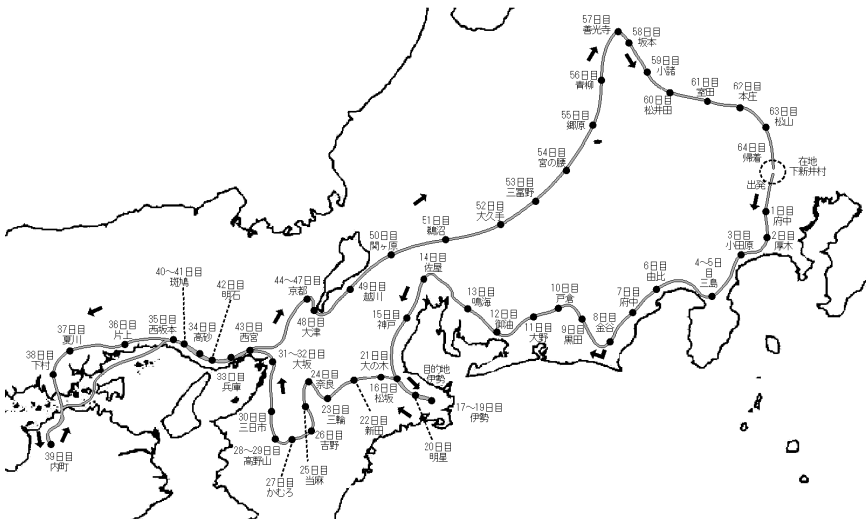


図2 下新井村の鈴木源五郎の旅程

鈴木源五郎「伊勢参宮道中記」(1857)『所沢市史 近世史料Ⅱ』所沢市、1983年、より作成。

表3 下新井村の鈴木源五郎による旅の歩行距離

日程	区間	距離 (km)	日程	区間	距離 (km)	日程	区間	距離 (km)
1日目	在地～府中	15.6	23日目	～三輪	39.9	45日目	京都逗留	
2日目	～厚木	31.2	24日目	～奈良	19.5	46日目	京都逗留	
3日目	～小田原	32	25日目	～当麻	30.6	47日目	京都逗留	
4日目	～三島	31.2	26日目	～吉野	40.3	48日目	～大津	26.7
5日目	三島逗留		27日目	～かむろ	39	49日目	～越川	48.3
6日目	～由比	38.5	28日目	～高野山	19.5	50日目	～関ヶ原	39
7日目	～府中	28.8	29日目	高野山逗留		51日目	～鶴沼	51.6
8日目	～金谷	32.7	30日目	～三日市	19.5	52日目	～大久手	38.9
9日目	～黒田	33.1	31日目	～大坂	28.3	53日目	～三富野	53.2
10日目	～戸倉	25.4	32日目	大坂逗留		54日目	～宮の越	48.1
11日目	～大野	33.1	33日目	～兵庫	44.9	55日目	～郷原	35.1
12日目	～御油	36.9	34日目	～高砂	39.4	56日目	～青柳	36.2
13日目	～鳴海	33.1	35日目	～西坂本	21.5	57日目	～善光寺	31.2
14日目	～佐屋	40.5	36日目	～片上	56.6	58日目	～坂本	13.9
15日目	～神戸	40.9	37日目	～夏川	62.4	59日目	～小諸	31.2
16日目	～松坂	36.9	38日目	～下村	27.3	60日目	～松井田	40.9
17日目	～伊勢	19.5	39日目	～内町	23.2	61日目	～室田	29.3
18日目	伊勢逗留		40日目	～斑鳩	31	62日目	～本庄	47.3
19日目	伊勢逗留		41日目	斑鳩逗留		63日目	～松山	38.2
20日目	～明星	11.7	42日目	～明石	39	64日目	～在地	31.6
21日目	～大の木	27.3	43日目	～西宮	38.5			
22日目	～新田	42.9	44日目	～京都	54.6			

鈴木源五郎「伊勢参宮道中記」（1857）『所沢市史 近世史料Ⅱ』所沢市、1983年、より作成。

表4 下新井村の鈴木源五郎による旅の歩行距離の傾向

計測対象日数	55日	
総歩行距離	1907km	
1日平均の歩行距離	34.6km	
最長の歩行距離	62.4km	
最短の歩行距離	11.7km	
歩行距離の割合	1桁台	0日
	10km台	7日
	20km台	9日
	30km台	25日
	40km台	9日
	50km台	4日
	60km以上	1日

鈴木源五郎「伊勢参宮道中記」(1857)『所沢市史 近世史料Ⅱ』所沢市、1983年、より作成。

の行動範囲を越えた世界は「異文化世界」であるという意識が少なからず働き、居住地域を越境して道中を楽しむ「旅」は庶民にとって異文化に触れる絶好の機会ともなっていた。先にあげた『旅行用心集』に、他国に出れば言葉や風俗が異なることは当然のことなので、これを嘲笑しては災いのもとになるという趣旨の戒めが記されているのは⁽¹⁵⁾、このことを示唆するものであろう。ゆえに、近世の旅人によるルート選択の動機は、滅多にない旅の機会に道中の異文化に触れて楽しむことにあったといえる。

2-3 文久2(1862)年、鹿田村の田中喜宗治の旅

最後に取り上げるのは、文久2(1862)年に鹿田村(現・みどり市)の田中喜宗治が伊勢参宮の旅をした際に認めた『伊勢参行紀行』である(同行者数は不明)。この旅日記が他の2編の旅日記と比較して特徴的なのは、喜宗治は伊

勢に至る往路ルートとして中山道を選択し、東海道を復路に位置づけていることである。その理由は定かではないが、おそらくは東海道よりも中山道を経由した方が、早期に伊勢に到着するものと判断したためであろうか。

さて、在地を出立した喜宗治が中山道の急峻な道りを歩いて最初に向かったのは、信州の善光寺であった。善光寺付近に2泊した後は再び中山道に合流し、途中で中山道を外れて名古屋方面に向かった。13日目に名古屋に宿泊し、その後は他の2編の旅日記と同じく佐屋路、東海道、伊勢路を経由して17日目に伊勢に到着した。伊勢に4泊した後、喜宗治も奈良や高野山にて寺社巡りを楽しみ、31日目に大坂に到着し当地で2泊する。次いで、京都に3泊してからは、東海道をひたすら進み49日目に江戸に到着している。江戸で3泊した後

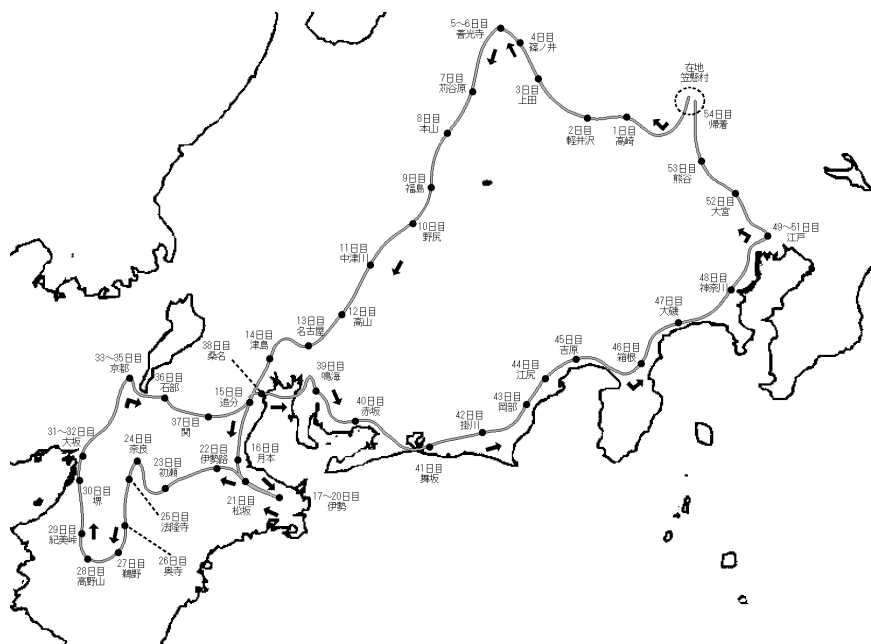


図3 鹿田村の田中喜宗治の旅程

※田中喜宗治「伊勢参行紀行」(1862)『笠懸村史 別巻 資料編近世史料集』笠懸村、1989年、より作成。

表5 鹿田村の田中喜宗治による旅の歩行距離

日程	区間	距離 (km)	日程	区間	距離 (km)	日程	区間	距離 (km)
1日目	在地～高崎	39	19日目	伊勢逗留		37日目	～関	40.4
2日目	～軽井沢	37.8	20日目	伊勢逗留		38日目	～桑名	39.9
3日目	～上田	50.7	21日目	～松坂	19.5	39日目	～鳴海	33.2
4日目	～篠ノ井	25.4	22日目	～伊勢路	23.4	40日目	～赤坂	40.7
5日目	～善光寺	13.7	23日目	～初瀬	47.7	41日目	～舞坂	43.1
6日目	善光寺逗留		24日目	～奈良	27.3	42日目	～掛川	42.8
7日目	～荻谷原	67	25日目	～法隆寺	14.6	43日目	～岡部	33.9
8日目	～本山	37.1	26日目	～奥寺	33.2	44日目	～江尻	25.7
9日目	～福島	38.2	27日目	～鶴野	37.5	45日目	～吉原	29.6
10日目	～野尻	29.6	28日目	～高野山	23.7	46日目	～箱根	38.8
11日目	～中津川	36.2	29日目	～紀美峠	11.7	47日目	～大磯	46.8
12日目	～高山	23.4	30日目	～堺	31.2	48日目	～神奈川	38
13日目	～名古屋	27.3	31日目	～大坂	8.2	49日目	～江戸	39
14日目	～津島	21.5	32日目	大坂逗留		50日目	江戸逗留	
15日目	～追分	31.2	33日目	～京都	50.7	51日目	江戸逗留	
16日目	～月本	33.2	34日目	京都逗留		52日目	～大宮	27.5
17日目	～伊勢	25.4	35日目	京都逗留		53日目	～熊谷	35.3
18日目	伊勢逗留		36日目	～石部	40	54日目	～在地	35.3

※田中喜宗治「伊勢参行紀行」(1862)『笠懸村史 別巻 資料編近世史料集』笠懸村、1989年、より作成。

は、中山道経由で54日目に鹿田村に帰着した。

この道中を、喜宗治は距離的にみてどのように歩いたのであろうか。喜宗治の旅における総歩行距離は約1495.4kmで、1日平均では約33.2kmとなり、他の2編の旅日記と類似した傾向が確かめられる。また、最長歩行距離(善光寺～荻谷原間)の約67kmは本稿で取り上げた3編の旅日記の中で最も長い距離を示

表6 鹿田村の田中喜宗治による旅の歩行距離の傾向

計測対象日数	45日	
総歩行距離	1495.4km	
1日平均の歩行距離	33.2km	
最長の歩行距離	67km	
最短の歩行距離	8.2km	
歩行距離の割合	1桁台	1日
	10km台	4日
	20km台	12日
	30km台	18日
	40km台	7日
	50km台	2日
	60km以上	1日

※田中喜宗治「伊勢参行紀行」(1862)『笠懸村史 別巻 資料編近世史料集』笠懸村、1989年、より作成。

している一方、最短歩行距離（堺～大坂間）の約8.2kmは3編のうち最も短い距離となる。さらに、表6を通して距離別の割合をみると、30km台を中心に比較的均等に分布しているところも特徴的である。

3. 近世庶民の伊勢参宮の旅にみる歩行距離の傾向

以上、往復路の全行程が明確になっている3編の旅日記を取り上げ、各々の旅人の道中における1日あたりの歩行距離を分析した。次いでここでは、彼らの旅が示す歩行距離の傾向を三通りの視点から検討してみたい。

3-1 所要日数の違いが歩行距離に及ぼした影響

まずは、在地を出立してから帰着するまでの総日数（=所要日数）の違いが、歩行距離に及ぼした影響をみておきたい。所要日数の多い旅では、体力面

に配慮して毎日の歩行距離を短めに設定していた可能性があると考えたからである。

このことを知るために作成した表7によれば、旅の総日数と平均歩行距離を見比べてみても、そこには明確な相関関係は生じていない。ゆえに、この3編の旅日記に限って言及するならば、旅の所要日数が歩行距離に大きな影響を及ぼすことはなく、旅人は所要日数の多少に関わらず毎日のように平均的な距離を歩くよう努めていたと類推されよう。それは、旅日記ごとに作成した前掲の一覧表(表1、3、5)によっても知ることができる。

表7 所要日数の違いが歩行距離に及ぼした影響

	総日数	平均	最長	最短
滝島忠右衛門の旅	28日	36.6km	46.8km	19.5km
鈴木源五郎の旅	64日	34.6km	62.4km	11.7km
田中喜宗治の旅	54日	33.2km	67km	8.2km

3-2 時間的経過が歩行距離に及ぼした影響

次いで、道中における時間的経過が歩行距離に及ぼした影響を探ってみよう。日数を重ねるごとに疲労が蓄積していくことを思えば、旅の序盤と終盤では歩行可能な距離にも違いが生じる可能性が想定されるためである。

表1、3、5をみると、道中の時間的経過と1日あたりの歩行距離との間に、反比例の関係性は認められないことがわかる。このことから、近世の旅人は、いかに旅の期間が数ヶ月にもおよぼうとも、在地を出立してから再び帰着するまで一貫して平均値程度の距離を歩き、一定のペースを保ち続けたといえよう。

近世後期においては、総人口の6人に1人が伊勢参宮の旅に出ていたといわれる⁽¹⁶⁾。だとすれば、当時の旅人は決して特殊能力の保持者だったわけではなく、1日平均で35km程度の距離を長期間にわたって歩き続けることは、この時代の庶民にとって特段の困難を伴うものではなかったと類推するものである。

3-3 目的地（伊勢）到達の前後にみる歩行距離の違い

最後に、本稿が取り上げた伊勢参宮の旅の目的地である伊勢への到達を基準として、その前後の歩行距離を比較して違いがみられるのかどうかを検討してみよう。旅人が目的地になるべく早く到達すべく、在地～伊勢間（往路）の歩行距離を長めに設定していた可能性が想定されるためである。

このことを実際に検討してみると（表8参照）、伊勢到達の前後で歩行距離に顕著な違いは生じておらず、いずれも全行程の平均値とほぼ同様の距離を歩いていたことがわかる。したがって、旅人は目的地の到達前後に関わらず、全行程において平均的な距離を歩く傾向にあったといえよう。

表8 目的地（伊勢）到達の前後にみる歩行距離の違い

	全行程の平均	伊勢到達前の平均	伊勢到達後の平均
滝島忠右衛門の旅	36.6km	35.5km	37.7km
鈴木源五郎の旅	34.6km	31.8km	35.8km
田中喜宗治の旅	33.2km	33.5km	33.1km

4. むすび

本稿は、近世庶民の伊勢参宮の旅を取り上げ、彼らが道中で歩んだ距離の傾向を明らかにしようとするものであった。検討の結果は、以下のように整理することができる。

まず、近世庶民の伊勢参宮の旅日記のなかから、旅の往復路の情報が明確に記述されている3編を抽出し、各々の旅の行程と歩行距離を分析した。すると、いずれの旅日記も往復の1日平均で35km前後の距離を歩いていたことが明らかとなった。

次いで、この3編の旅日記が示す歩行距離の傾向を検討した。その結果、①近世の旅人は所要日数の多少に関わらず毎日のように平均的な距離（35km程度）を歩くよう努めていたこと、②在地を出立してから再び帰着するまで一貫して

平均値程度の距離を歩き一定のペースを保ち続けたこと、③目的地(伊勢)の到達前後で旅の歩行距離に顕著な違いが生じることはなかったことが確かめられた。

【注記および引用・参考文献】

- 1) 拙稿「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』8号、2011年3月、33～54頁。
- 2) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」『交通史研究』13号、1985年4月、69～84頁。
- 3) 櫻井邦夫「近世における東北地方からの旅」『駒沢史学』34号、1986年1月、144～181頁。
- 4) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷」『筑波大学人文地理学研究』14号、1990年3月、231～255頁。
- 5) 拙稿「近世後期における伊勢参宮の旅のルートと名所見物」『日本体育大学紀要』35巻2号、2006年3月、113～129頁。
- 6) このことについて鈴木は、「さまざまな情報からどのような事柄に視点をあてて問題を明らかにするかは、研究者の問題意識如何に大きく関わって」(鈴木章生「社寺参詣をめぐる研究の動向と展望」『交通史研究』56号、2005年2月、85頁) いると指摘する。
- 7) ここでいう旅日記とは、旅程順に日付、天候、宿泊地、旅籠名、旅籠代、昼食代、間食代、訪問地とその若干のコメント、賽銭、渡船代、その他購入した品々の代金などが列記されたものであり、いわば金銭出納帳ないし日誌的な性格の史料である。全ての旅日記にこれらの項目が漏れなく記されているわけではないが、そのいずれかについて記録されているとあってよい。このように、旅日記は「個人的な旅の記録というよりも、家族や地域社会に伝えるべき情報を網羅した報告書的な役割を担っていた」(田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」『交通史研究』49号、2002年3月、20頁) ものであり、旅人が見聞した異文化世界の情報を在地の人々へ提供するためのメディアともなっていた。
- 8) 拙稿「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』20号、2007年3月、

- 1～22頁。拙稿「近世後期における庶民女性による旅の歩行距離について」『体育史研究』27号、2010年3月、33～45頁。拙稿「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』8号、2011年3月、33～54頁。
- 9) 滝島忠右衛門「伊勢道中附」(1768)『鶴ヶ島町史 近世資料編Ⅳ』鶴ヶ島町、1985年、607～612頁。
- 10) 鈴木源五郎「伊勢参宮道中記」(1857)『所沢市史 近世史料Ⅱ』所沢市、1983年、429～448頁。
- 11) 田中喜宗治「伊勢参行紀行」(1862)『笠懸村史 別巻 資料編近世史料集』笠懸村、1989年、241～258頁。
- 12) 拙稿「近世後期における伊勢参宮の旅のルートと名所見物」『日本体育大学紀要』35巻2号、2006年3月、113～129頁。
- 13) 拙稿：「近世後期の伊勢参宮の旅にみる楽しみ方の類型」『日本体育大学紀要』36巻2号、2007年、183～196頁。
- 14) 八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋茂兵衛・須原屋伊八、1810年、1帖（筆者蔵）。
- 15) 八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋茂兵衛・須原屋伊八、1810年、17帖（筆者蔵）。
- 16) 伊勢神宮は近世において全国的に大流行した旅の目的地であった。ほぼ60年周期で起った「お陰参り」という社会現象は、庶民による伊勢参宮の流行に拍車をかけることにもなった。お陰参りは全国から参詣のための群衆が一同に伊勢へと押し寄せた社会現象であるが、大規模なものが慶安3（1650）年、宝永2（1705）年、明和8（1771）年、文政13（1830）年に起っている。このうち、文政13（1830）年のお陰参りが最大規模であったとされている。この時に伊勢を訪れた人数は、伊勢宮川の舟番所改帳の写しによれば、3月晦日から6月20日までの間でおよそ427万6500人に達していたという（新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982年、1346頁）。当時代における日本の総人口は約3000万人、そのうち武士や公家、僧侶などを除いた町方の人口は約2600万人といわれていることから（速水融『歴史人口学で見た日本』文藝春秋、2001年、56～57頁）、先の数字に従えば文政13（1830）年のお陰参りでは実に日本人の6人に1人が伊勢参宮を行っていた計算になる。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）「近世後期における庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離に関する研究」（課題番号：23700742）の助成を受けた研究成果の一部である。

—たにがま ひろのり・法学部准教授—